

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Session 4 : San : Ndebele Decoration and Museums

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 亀井, 哲也 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003499

インデベレの装飾と博物館

亀 井 哲 也*

Ndebele Decoration and Museums

Kamei, Tetsuya

- | | |
|-------------------|---------------------------|
| 1 はじめに | 3 南アフリカにおける
インデベレ壁絵の展示 |
| 2 インデベレ概要 | 4 日本におけるインデベレ壁絵の展示 |
| 2.1 3つのインデベレ | 5 まとめ |
| 2.2 インデベレの歴史的背景 | 6 後記 |
| 2.3 アパルトヘイトとインデベレ | |
| 2.4 インデベレの装飾 | |

1 はじめに

装飾は、世界各地のさまざまな民族で民族文化の表象として扱われており、その例は枚挙にいとまがない。住まいにおいても同様である。彫刻、木組み、絵、タイル、そして家具、調度、庭など、その飾り方は千差万別であるが、多くの民族の住まいに装飾が施されている。しかし、インデベレのように、アクリル系水性ペンキで住まいの内外壁をカラフルな幾何学模様で飾り、それを「伝統」と表現する民族は珍しい存在である。本稿では、このインデベレの装飾文化を事例として取り上げ、次のように論を展開する。

*野外民族博物館リトルワールド，元国立民族学博物館共同研究員

Key Words : Ndebele, museum, mural, decoration

キーワード：インデベレ，博物館，壁絵，装飾

まず白人入植以降のンデベレの歴史から、ンデベレという民族を取りまいていた南部アフリカおよび南アフリカ共和国の政治経済的な状況を説明するとともに、ンデベレの装飾文化のあらましや、壁絵を主とする装飾文化がンデベレ民族文化の表象となった背景を紹介する。

次に、南アフリカ共和国と日本の博物館の事例から、ンデベレの壁絵がどのように展示されているかを報告し、壁絵および壁絵の描き手の博物館展示における位置づけを明らかにしようと試みる。

その上で、ンデベレの壁絵が「アート」として扱われ、描き手が「アーティスト」と呼ばれる事実を取り上げ、壁絵がンデベレの民族文化の表象とされた過程との脈絡の違いと、このような「アート」の博物館における展示について論じる。

2 ンデベレ概要

2.1 3つのンデベレ

現在南部アフリカには、ンデベレを自称する民族グループが大きく分けて3つ存在している。同じ名称を用いているが、言語、文化、歴史的にこの3集団は異なっており、ひとつの民族集団として捉えることはできない (van Warmelo 1937: 53)。3集団の混同を避けるために、北から、ジンバブエ・ンデベレ (Zimbabwe Ndebele)¹⁾、北トランスヴァール・ンデベレ (Northern Transvaal Ndebele)²⁾、そして南トランスヴァール・ンデベレ (Southern Transvaal Ndebele) と、それぞれの居住する地域の名をつけて区別し、呼び習わすのが一般的である。ジンバブエ・ンデベレはジンバブエに居住するグループであり、北トランスヴァール・ンデベレと南トランスヴァール・ンデベレは、南アフリカ共和国³⁾の北東部にあるトランスヴァール高原の一部に居住するグループである。3集団の主たる居住地域は図1に示す通りである。この報告で取り上げるのは、南アフリカ内のトランスヴァール高原南部一帯、首都プレトリア東部約120km離れたところを中心として居住する南トランスヴァール・ンデベレであり、以降ンデベレと表現し指し示すのはこのグループである。

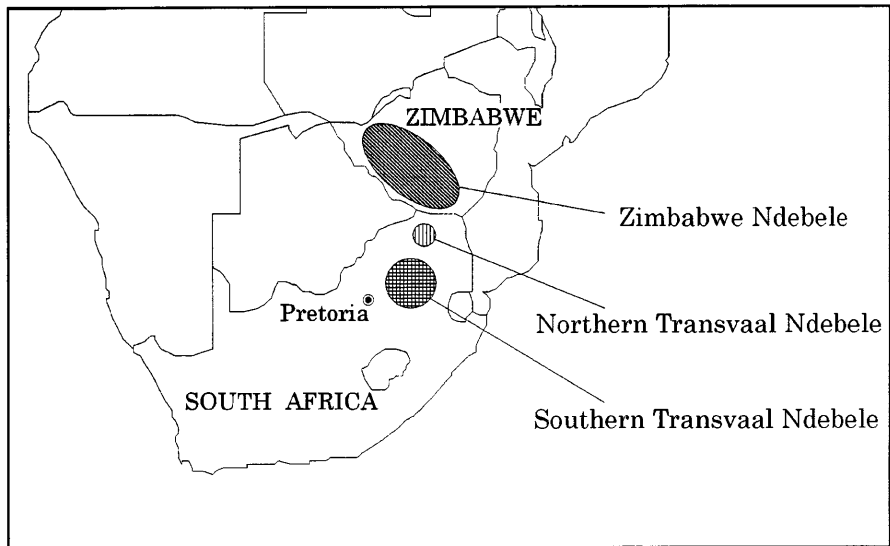


図1 南部アフリカ、ンデベレ3集団の主な居住地域

2.2 インデベレの歴史的背景

もともとンデベレは⁴⁾、牧畜を中心として現在のプレトリア近郊に居住していた。19世紀半ばからオランダ系移民アフリカーナーが、イギリス系移民に押し出される形で内陸に進出し、トランスヴァール高原に居住していた多くの民族と衝突をおこした。ンデベレもその難から逃れ得ず、アフリカーナーと何度か戦いを繰り返し、その居住地を次第に東へ移動させていった。最終的には、プレトリアから東方約200kmほどのところ、ドラケンスバーグ山脈の一翼を担う山岳地帯ロセネカール付近にまで移動し、砦を山塊に築き立てこもった。しかし1883年、アフリカーナーの度重なる攻撃に敗れ、家畜や土地といった財産すべてを没収されてしまった。さらに、戦いに参加したアフリカーナーの農場で5年間の労働を強いられた。プレトリアから東方にのびる道沿いのブロンコスプレイト、ウィットバンク、ミドルバーグといった町は、この頃にできた白人の町である。この周辺の農場にンデベレの人びとは移り住まわされた。5年間の労役の後も、自分の土地を失ったンデベレの多くは、アフリカーナーの経営する農場付近に労働者として住みついた。この民族離散の時期に、ンデベレ社会はいったん崩壊し、多くの習慣が失われた。

1886年にヨハネスブルク西方で金鉱が発見され、続いてトランスヴァール高原に豊

富な石炭が埋蔵されていることが判明し、多くの労働力がこの地に集中しはじめた。鉱山採掘の活発化は、鉱山労働者への食糧供給を促進する作用をもたらした(星・林 1978: 82-87)、ンデベレが居住する地域はヨハネスブルク等の鉱山、大都市の後背地として大きな意味を持つようになった。また農場労働者としてばかりでなく、鉱山労働者あるいは都市労働者として、ンデベレの多くの者が働きに出た。ズルーやコーサといった南アフリカ内で大人口を有する民族も同様に収穫をしたわけだが、居住地と収穫先の距離の差はンデベレの人びとに有利に働き、男女を問わず多くのンデベレが鉱山あるいは都市で就労した。

19世紀末からのンデベレをめぐる一連の変化、すなわち土地財産の喪失、民族離散、白人農場付近への居住、鉱山や都市への収穫といった事柄は、ンデベレに多くの白人文化をもたらした。他の民族もまた同様に白人文化の影響を受けたわけだが、ンデベレの場合は特に、自らが治める土地を完全に奪われ白人文化維持の空間が消失あるいは限られていたため、影響の深度が大きかった。ンデベレの装飾文化は、この100余年の白人文化の影響が強く反映されて展開したものと考えられる。

2.3 アパルトヘイトとンデベレ

南アフリカ政府の人種隔離政策下においてンデベレの行った行動は、この政策に対

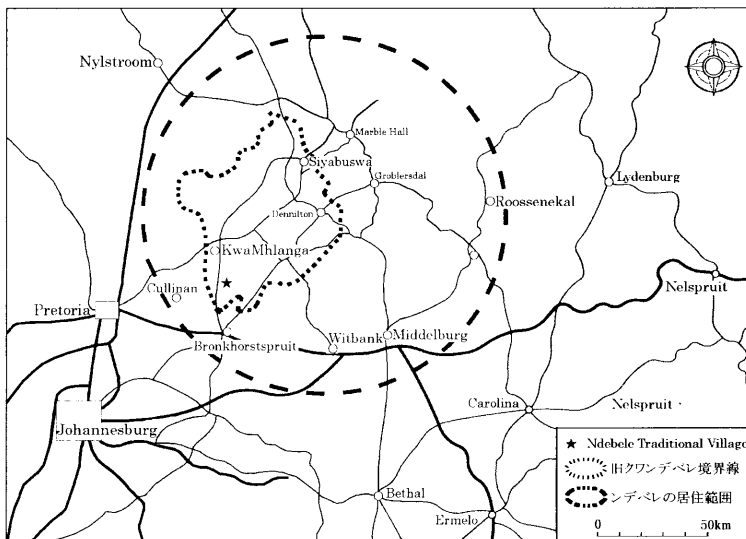


図2 ンデベレ居住地域詳細

する世界的認識とは逆行するものであった。1959年バンツール自治促進法が制定された。これは、8つのバンツール・ホームランドを建設し、そこに黒人の自治政府を作るというものであった。この法律では、インデベレは独立した民族集団として認められておらず、ボプタツワナ (Bophuthatswana) あるいはレボワ (Lebowa) といった他の民族のホームランドがインデベレを吸収するという内容であった。アパルトヘイトの是非はすでに歴史的に明らかであるが、そのアパルトヘイトにも認められない民族としてインデベレはあったことになる。

1960年代のインデベレの政治的行動は、アパルトヘイト体制の中で自分たちの民族をどう認知させるかというものであった。インデベレは南アフリカの中で極めてわずかな人口しか持たない少数民族である⁵⁾にもかかわらず、人種隔離政策下でホームランド設立を要望する動きを進め、1972年にはインデベレのホームランド設立が承認された。1980年に自治ホームランド、クワンデベレ (KwaNdebele)⁶⁾がプレトリア東部に「建国」された。ホームランドとして南アフリカ政府からインデベレに与えられた土地は、プレトリア東部にあり、もともとインデベレの土地であったわけではないが、多くのインデベレが白人の町の周辺から離れ、クワンデベレに移り住みはじめた。1970年から1980年までのこの地の人口増加率は415%にもものほり、1980年の国勢調査では人口が156,380人となった (Randall 1983: 45)。

1994年、全人種参加の憲法制定議会選挙が実施され、南アフリカは新たな道を進みはじめた。ホームランドは撤廃され、旧クワンデベレ・ホームランドは現在、ムプマランガ (Mpumalanga) 州⁷⁾の一部となり、クワンデベレという名称は、行政区域としては残っていない。クワムシュランガ (KwaMhlanga) にあった旧クワンデベレ政府の庁舎も職員も、ムプマランガ州に吸収され、今日に至っている。

2.4 インデベレの装飾

ホームランド設立までの過程で、いったん離れ離れになった民族の再統合をはかり、新しい民族文化を形成するためにインデベレは装飾を利用したのだが、その時、インデベレが自らの「伝統」文化としたのが、当時一部の地域で行なわれていた土壁にアクリル系水性ペンキでカラフルな幾何学模様を描く壁絵や、ビーズワークなどであった。

カラー写真11 (本号 p.160) には、カラフルな幾何学模様の壁絵を持つ家屋を背景に、5色のストライプ模様の毛布をはおり、多彩なビーズワークを身にまとった女性の姿が写っている。これが、インデベレの典型的な「伝統」文化であり、近隣の諸民族



写真1 教会

からンデベレをきわだたせ、自他ともにシンボルとして認識されている装飾である。

カラー写真12（本号 p.161）は、ンデベレの王（*ikosi*）⁸⁾の館、すなわち王宮の、門である。この王宮がある村には現在でも壁絵のある家屋が林立している。逆にいえば、それ以外の村では探さねば見ることができないものとなっている。カラー写真13, 14（本号 p.162）はこの地区に建つ家屋の例で、写真1は同地域の教会⁹⁾である。ホームランド時代のンデベレは、王を中心に再統合され、王およびその一族がンデベレの物質文化上の特徴である豊かな装飾性を体現し、広める役割を担った。

3 南アフリカにおけるンデベレ壁絵の展示

次に、このような背景を持っているンデベレの壁絵が、現在どのように南アフリカで展示されているかを、旧クワンデベレ政府が設立したンデベレ伝統村（Ndebele Traditional Village）の事例から説明する。ンデベレ伝統村はクワンデベレの行政の中心地であるクワムシュランガの南15km程のところにある。プレトリアやヨハネスブルクからは、ワンデイ・ツアーが組まれ、観光客がンデベレの壁絵を見学に来ている。

ンデベレ伝統村は、1990年にンデベレの文化を維持、保存、伝承し、内外に広める

ことを目的として設立された博物館である¹⁰⁾。ここではインデベレの住居の変遷を実際に家屋を復元した展示によって表現しており、写真2から写真7まではその一部である。

インデベレの家屋および壁絵の変化を、写真と対照させながら説明する¹¹⁾。

- 写真2 約200年前、白人との本格的な接触以前のインデベレの家屋には壁がなかった。すなわち壁絵もまた存在しなかった。
- 写真3 およそ100年前、円形の壁が低く立ち上がり、壁には土から採集した顔料で壁絵が描かれるようになった。壁は土をつき固めて立ち上げたものである。
- 写真4 約50年前、円形の壁が高くなった。西欧的な椅子を家屋に持ちこみ利用するようになったためという。壁絵の素材は顔料を用いている。
- 写真5 40年程前、家屋が方形となり水性ペンキの使用が始まった。壁絵のデザインが大きく変化している。
- 写真6 約20年前、屋根の形が変化したとともに、壁の表面の仕上げにセメントが用いられるようになった。
- 写真7 約10年前、屋根にトタンが用いられるようになったが、方形という形と家屋前の低い腰掛け部は40年程前のタイプから変化していない。壁は土や砂の多い粗いセメントブロックを積み上げたもので、表面をセメントで仕上げている。この家屋は、1990年の博物館設立時にモダンタイプとして表現されたものであるが、同時にまた今のインデベレの「伝統的」家屋として語られているものでもある。

この博物館を設立した旧クワンデベレ政府は、自らの「伝統」文化の発生過程と家屋とを組みにして紹介した。すなわち、「生活と結びついた壁絵」という展示がここではなされているのである。もともと家庭の主婦が土壁を補強し美しくするために描きはじめた壁絵はその家屋とセットであるということを、このインデベレ伝統村は表現しているのである。

博物館インデベレ伝統村には現在12名の描き手がいる。インデベレの主婦の中から壁絵がうまいと評判を持つ者が選抜されて働いている。その他にも古いタイプの壁や屋根を作ることができる男性スタッフなどがおり、総勢18名が月曜日から金曜日までこの博物館に住み込みながら、来館者に対応している¹²⁾。

ホームランドの廃止という歴史の流れの中、ここは現在ムプマランガ州の管轄となっている。ムプマランガ州にはインデベレのみならず、スワジヤソト、そして多くのアフリカーナーも居住している。州政府はすべての民族・人種に平等なサービスを提供しようとし、当然ながらインデベレだけを特別扱いすることはない。これまで旧クワンデベレ政府の文化行政の中心であったこの博物館は、相対的にその位置づけを低下さ



写真2 約200年前

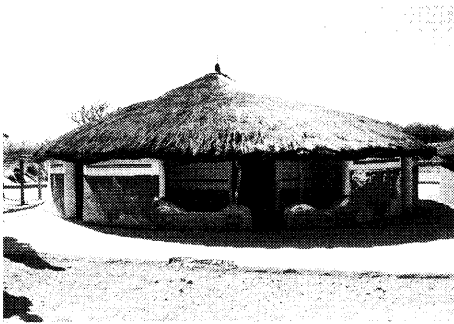


写真3 約100年前

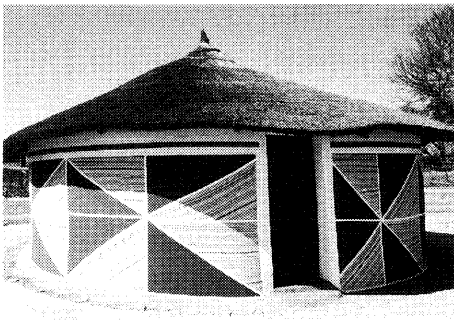


写真4 約50年前

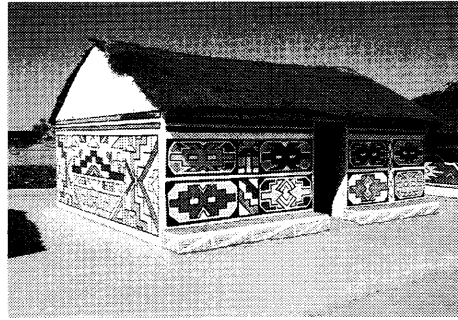


写真5 約40年前



写真6 約20年前

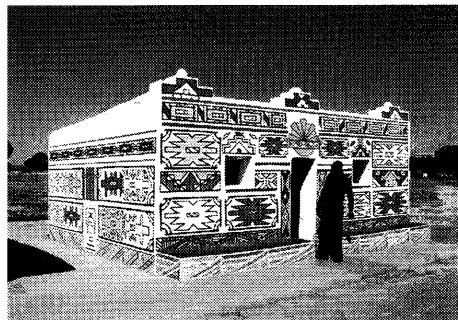


写真7 約10年前

せた。それに伴い、経済的に運営に支障をきたし、人員の削減、売店の閉鎖、家屋補修の遅延といった問題が山積みされている。そのような状況下、ひとつの出来事を観察する機会に恵まれた。

写真8は写真4と同じ家屋で、約50年前の天然顔料を用いた壁絵を持つ家屋として紹介されていた円筒形家屋である。全く壁絵の図柄が異なることが見て取れる。この模様は南アフリカのあるサッカーチームのマークで、このサッカーチームのメンバーを登用したある清涼飲料水のテレビ・コマーシャルを制作するにあたり描かれた。コマーシャル制作会社は、家屋壁絵の描き替えと撮影の許可を博物館に求め、幾ばくかの金銭で実施したということである。1998年12月のことであった。この時、博物館の責任者は、年が明けたらすぐに元どおりに戻すと言っていたが、1999年7月に再訪した折にはまだこのままであった。

写真9 (p.190) は写真8の脇に建つ家屋である。この図案自体は、インデベレのデザインなのだが、写真8の家屋と同じ時にテレビ・コマーシャルのために描き替えられたもので、同様に1999年7月までこのままであった。1986年に写真家マーガレット・コートニー＝クラークがインデベレの壁絵を紹介した写真集 (Courtney-Clarke 1986) を出版している。コマーシャル制作会社のスタッフは、その写真集を持ってきて写真を指差し、このデザインを描いてくれと依頼したという。写真集は、インデベレの壁絵を

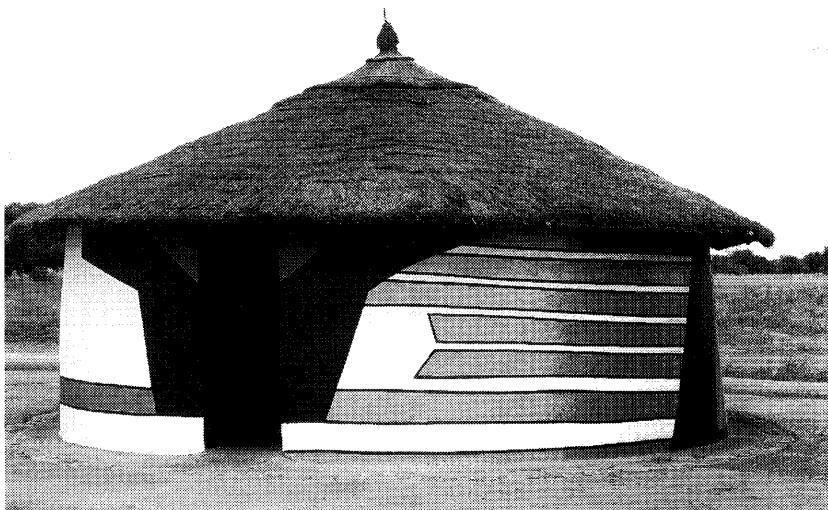


写真8 サッカーチームのマークが描かれた展示家屋

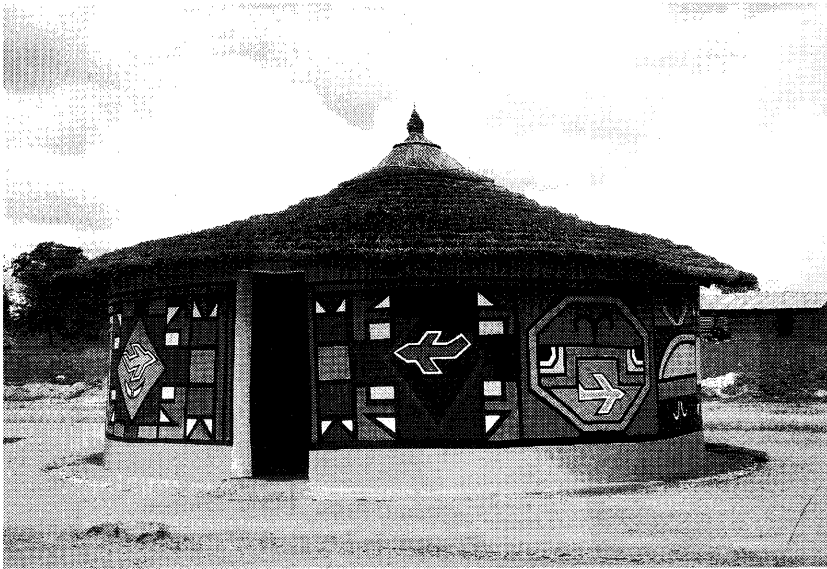


写真9 写真集から選ばれたデザインが描画された展示家屋

切り取って、書物という平面的な媒体において扱うものである。家屋の壁から切り離されたンデベレの壁絵は独り歩きをはじめた。そして、ここで紹介した出来事は、独り歩きをはじめた壁絵が、皮肉にもまたンデベレの家屋の壁に戻ってきた事例といえる。

ンデベレの装飾は、離散した民族のシンボルとして用いられ、その発生には少なからぬ白人文化の影響があった。もともと家庭の主婦が家屋の補修と美化のために描いた壁絵は、政府の博物館展示によってある種の権威付けを与えられた結果、別個な素材の上に表現されはじめ、ンデベレの日常生活から離れていった。

独り歩きをはじめた壁絵は、マーケットとしての白人社会を前提に存在している。前述の写真集をはじめ、諸外国で壁絵はアートとして紹介され、自動車のボディや飛行機の尾翼などが新しい「壁」となった。クワンデベレでも壁絵の独り歩きは始まっている。幾何学模様の壁絵を持つ家屋は内外の観光客の訪れるところとなり、カンバス布（写真10）に描いた「壁絵」を土産物あるいは「作品」としたり、ダチョウの卵（写真11）に「壁絵」を描き土産物として生産し、販売したりしている。当然、ヨハネスブルクやプレトリアといった都会の土産物屋でも販売されている。

ンデベレを取りまく状況は、ンデベレの暮らしの中での壁絵の位置づけを変容させ、壁絵をはじめとする装飾を生活の糧そのものにする者、「クラフトマン」を生み出して



写真10 キャンバス布に描画される「壁絵」

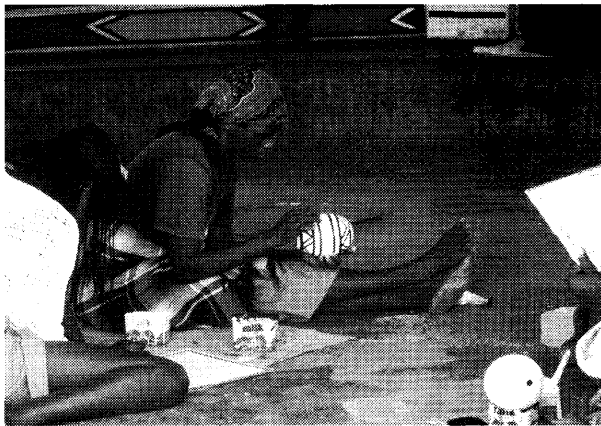


写真11 ダチョウの卵に描画される「壁絵」

いる。そしてその中の数名の描き手が、名前を持つ存在、「アーティスト」となっているのである。

最後に、南アフリカでのインデベレ壁絵の展示として、クワンデベレ以外の事例を紹介する。写真12(p.192)は、プレトリアにある博物館アフリカン・ウィンドウ(African Window)の入口の壁である。前述の博物館インデベレ伝統村に所属する描き手の中の3名が描いたものである。非常に鮮やかな美しい壁絵であるが、その記念プレートには次のように記されている。

インデベレ壁絵

除幕：1997年2月13日

博物館委員会委員長 J. M. レナケ教授

後援：BMW南アフリカ

ここにはその壁絵の制作者の名前はなく、除幕式に紐をひいた人間と、そのスポンサーの名前があるだけである。「無名の、あるいはンデベレという民族の壁絵」という扱いである。この博物館では、生活というよりもンデベレという民族とセットになって壁絵は展示されているということである。

4 日本におけるンデベレ壁絵の展示

筆者が所属する野外民族博物館リトルワールド（以下、リトルワールドと省略）¹³⁾では、1995年11月にンデベレの家屋を復元し（写真13）、現在も野外展示家屋として来館者に観覧の機会を提供している。ここでは、日本におけるンデベレ壁絵の一事例として、リトルワールドにおける家屋の復元と描画、そして展示の様子を説明する。

リトルワールドが、このンデベレの家屋を選定した動機のひとつには、ンデベレの華やかな装飾文化、壁絵の存在があげられる。野外展示場にて世界各地の家屋を復元し、そこに住む人びとの暮らしを紹介しようとするリトルワールドにおいて、ンデベレのように外観上強烈なインパクトを持つ家屋は、極めて魅力的であった。これ

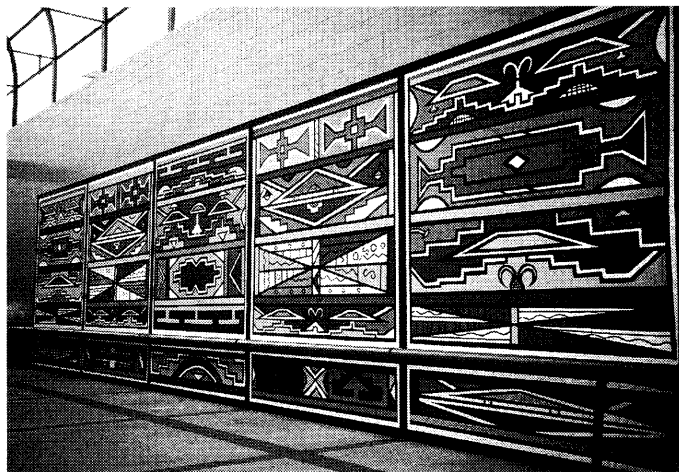


写真12 アフリカン・ウィンドウの壁絵

までリトルワールドでは、ブルキナファソのカッセーナ、タンザニアのニャキウサ、ケニアのレンディーレといった諸民族の家屋を復元してきたが、なかなかアフリカの人びとの秀でた造形・色彩感覚を表現することは難しかった。その点をこのインデベレの家屋は補うに十分な展示素材であったといえる。

図3 (p.194) は展示家屋の配置図である。展示は家屋単体ではなく、両親の家、息子の家、娘の家、祖母の家、そして男たちの集会場である東屋の5棟からなる。プラン作成にあたっては、当時のクワンデベレ政府文化局の方々から助言を得た。結果的には、インデベレにとってある種の理想的な一般家庭のホームステッドを再現できた。家屋の梁、出入口の扉、窓枠、そして祖母の家と東屋の屋根材は、クワンデベレにて収集したものを用了。

家屋復元の際には、壁絵の描き手として前述のインデベレ伝統村から4名のインデベレ女性を招聘した(写真14 p.195)¹⁴⁾。紹介しようとするインデベレ装飾文化そのものである壁絵をインデベレ人に描いてもらわなければ、博物館展示として成り立たない。このような考えは、リトルワールドの開館当初からのものである。4名には2ヵ月間かけて壁絵を描いてもらったが、注文はオーソドックスなものをというだけであった。できるかぎり拘束せずに描画してもらおうという気持ちが強くあった。ただ、来日しそのイメージを膨らませて日本のものを描くのは困るという気持ちだけは伝えた。写

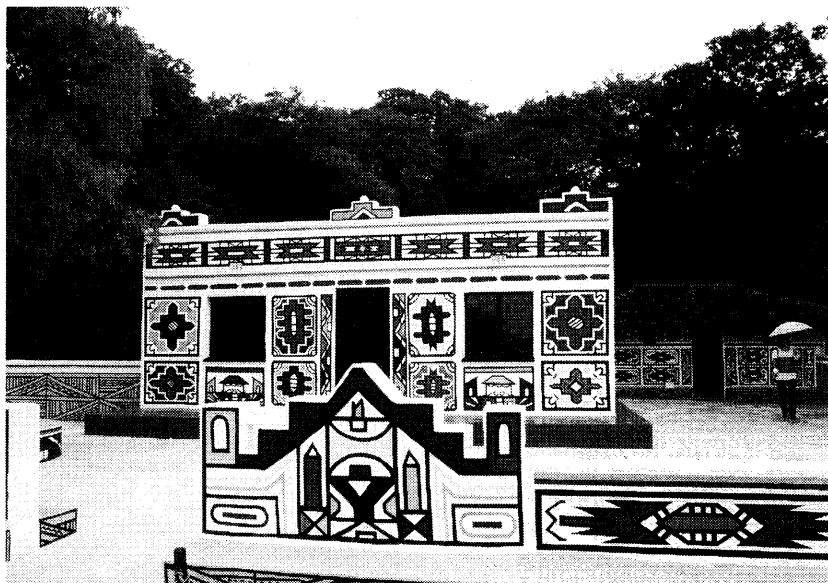


写真13 リトルワールドに復元したインデベレの家屋

真15 (p.195) のようにンデベレの民族衣装をまとった女性たちが壁絵を描く光景もまた、展示となり、多くの来館者がその姿を撮影していた。

展示目的のひとつには、西欧化・都市化する現代アフリカ社会の生活紹介ということがあった。現代、すなわち1990年代のンデベレの暮らしぶりを再現するために、復元家屋の中には、ヨーロッパスタイルの家具 (写真16 p.196) をはじめ、さまざまな生活用品を解説とともに配置した (写真17 p.196)。

実際にその生活ぶりを観覧した来館者からは、「これまで抱いていたアフリカのイメ

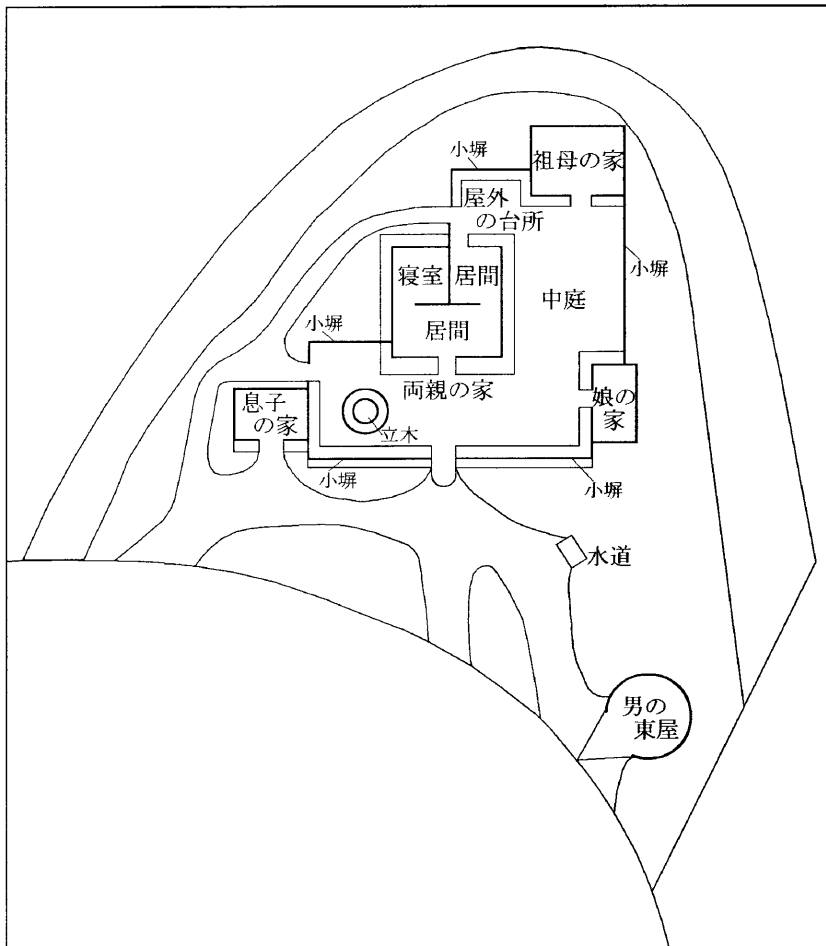


図3 復元家屋配置平面図

ージとかけ離れている」、「家具が立派なのに驚いた」などという感想を得た。早魃、飢餓、紛争、サバンナ、ジャングル、野生動物といったマスメディアが伝える一部のアフリカのイメージは、広くアフリカ全般のイメージへと誤解されがちである。来館者の持つイメージとは異なる現代アフリカの姿を提示し、来館者に新たな情報を提供するという点においては、概ね初期の目標を達成できたと考える。

展示展開としては、展示家屋のひとつで、現地撮影した写真やンデベレの居住地域を示す地図などを用い、その暮らしぶりや壁絵を中心とする装飾文化について紹介している。また、3つの家屋にマネキン4体を設置し、性別、世代別の民族衣装の違いなどを紹介している（写真18 p.197）。



写真14 家屋復元の協力者たち



写真15 壁絵を描く様子

視覚だけでなく、聴覚への働きかけとして、ンデベレのラジオでかけられているようなポピュラーソングを展示家屋内にBGMとして流し、その合間に音声による解説を挿入している。解説内容は、展示家屋についてそしてンデベレについてのもので、来館者に話しかけるような口調を用いている。この音声解説の中にはンデベレ語での



写真16 「両親の家」居間の様子

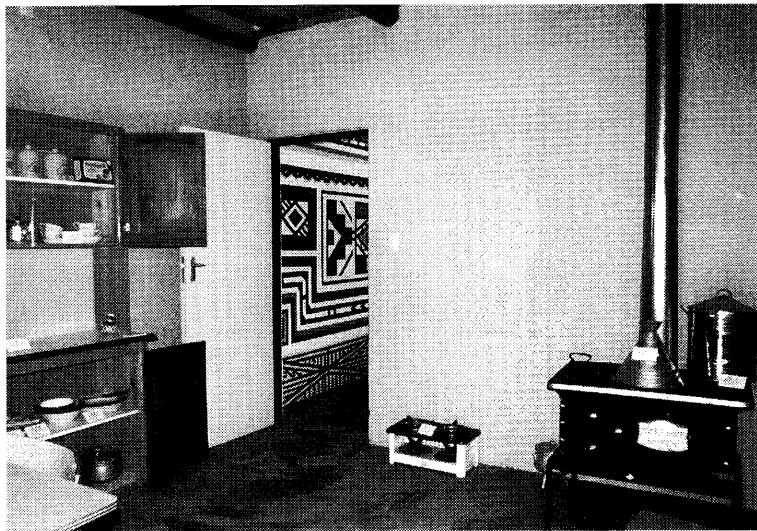


写真17 「両親の家」台所の様子

語りもあり、インデベレ語の音を体感してもらっている。

家屋の一般公開前後には、インデベレ紹介のセミナー（写真19 p.198）¹⁵⁾や本館メインホールでの特別展¹⁶⁾，そして博物館の季刊誌への記事掲載¹⁷⁾などさまざまな機会と手法を利用してインデベレの現在の暮らしぶりや、装飾文化がその中でどう位置づけられているかの伝達を試み、現在に至っている。

インデベレの家屋を復元してから5年が経過しているが、この間の来館者の反応を振り返るに、公開直後から来館者の関心は装飾そのものに強く引き寄せられていた。インデベレの暮らしぶりを紹介しようとする博物館の意図から離れ、インデベレの装飾文化が独り歩きしているきらいがある。来館者が展示物そのものである外観から受ける影響は、博物館が提供する文字や、写真や、音の情報の誘引力よりもずっと大きなものであったといえる。それはまた、展示しているインデベレ・アートのもつ力が、いかに大きいかということの表われであると考えられる。

5 まとめ

ここまで述べてきたように、インデベレの壁絵は、すでにその暮らしの一部というス



写真18 「両親の家」寝室に展示した父母のマネキン



写真19 セミナーの様子

タンスをはずれ、アートとして歩み始めている。しかし、博物館での扱いは、南アフリカでも日本でも「生活とのセット」というものであったり、「無名のンデベレという民族の壁絵」というものである。そこにはまだ「アーティスト」は存在していない。取り上げたくないという展示する側の意志が表われていると捉えることもできる。その一方、諸外国で壁絵の持つ力を表現しようとする時、そこには「アーティスト」が存在し、壁絵は「アート」として取り扱われている。

本稿では、ンデベレ装飾文化の中の壁絵を主に取り上げてきたが、南アフリカでは、ンデベレのビーズワークも土産物として随分売られている。アートギャラリーにもビーズの装身具や人形が並んでいるが、まだ壁絵のような作家はいない。「無名のンデベレのもの」として陳列されており、その位置づけは、室内展示でンデベレ文化を表現しようとする博物館や土産物屋でも同様である。

ンデベレがクワンデベレという自治ホームランドで民族文化の再編成を行なった時、これほどカラフルで特徴のある壁絵を持つ民族は他にいなかった。それゆえに彼らは民族文化を表象する際にこの「アート」を選んだのである。このとき壁絵はンデベレという民族全体に共有のものであったし、そう扱われた。またそう扱わなければ民族のシンボルとはならなかったと考える。ンデベレの壁絵は、他民族に対する独自性のシンボルであったのだ。壁絵はンデベレ民族統合の象徴として扱われたのである。

しかし、それが南アフリカ国内の諸民族のみならず、国外の人びとにまでンデベレ

のシンボルとして認識された後は、それ自身が持つ力で、壁絵が「壁」そのものから離れていった。立体物としての壁絵が平面的なものとなった時、生活に根ざした文化という次元が失われ、「アーティスト」が生まれたと考えられる。特別展「越境する民族文化」では、「アートが民族の範囲を越えて広まるとはどういうことか」という問題が扱われていたが、インデベレの壁絵の事例は、民族の範囲を越えて広まったことで「アート」となったと位置づけることができる。

「アート」として力を発揮し始めたインデベレの壁絵が、博物館の展示において意図とは異なる反応を来館者から引き出すことは、先に述べた。具体的には、文章などで繰り返し「すべてのインデベレの家屋がカラフルな壁絵を持っているわけではない」と説明していても、「インデベレの人たちは皆、こういう家に住んでいる」、「インデベレでは誰もがこういうカラフルな壁絵を描いている」などと思いきまれたりする。装身具で例をあげれば、「いつもあんな民族衣装を着ている」と思いきまれたりする。壁絵に目を奪われて、他のものが目に入らない状態になってしまうのだ。展示物には他にもおもしろいものがあるにもかかわらず、来館者は気づかない。気づいてくれない。力のある「アート」の展示は、民族文化全体を伝えようとする民族学系あるいは人類学系の博物館にとって、諸刃の剣なのである。

6 後記

本稿は、国立民族学博物館重点研究プロジェクト「文化表象の博物館人類学的研究」シンポジウム「アートと民族文化の表象：特別展『越境する民族文化』を中心に」（1999年12月）において発表したものをもとにした。また本稿中で報告した情報は、(財)リトルワールドによる調査(亀井 1995a)、文部省科学研究費補助金国際学術研究「南部アフリカ諸民族の民族学的研究」(亀井 1997; 1998) および「現代アフリカにおける文化運動とエスニシティの人類学的研究」(亀井 1999a; 2000) による調査で得たものである。

注

- 1) マタベレ (Matabele), あるいはマタビリ (Matabili) と称されることもある。
- 2) 近隣の民族であるソト (Sotho) の影響を強く受け、言語的にはソト語に近いという。
- 3) 以下の記述では、南アフリカ共和国を「南アフリカ」と略記する。なお、「南部アフリ

- カ」という表現は、アフリカ大陸南部地域の意味である。
- 4) 以下の記述は、(KwaNdebele Monument Committee 1983) および (Shabangu & Swanepoel 1989) に依拠する。
 - 5) 黒人総人口12,430,000人中、ンデベレは294,000人と概算されている (Horrell 1969: 30)。これは2.4%を占める値である。
 - 6) クワンデベレとは、「ンデベレの地」という意味である。
 - 7) ホームランド廃止直後は、東トランスヴァール州という名であったが、その後改称した。
 - 8) ンデベレにはふたりの王がいる。ンデベレ語の *ikosi* を、彼らは King と訳しているが、chief と訳す方が適切かと考える。ンデベレは、ンズンザ (Ndzundza) とマナラ (Manala) という2つのクランからなる (Kamei 1998: 48)。写真はンズンザ・クランの王宮で、シヤブスワ (Siyabuswa) 付近にある。
 - 9) 独立教会系の教会。多くのンデベレがキリスト教を信奉しているが、同時に伝統的占い師への信仰も根強い。
 - 10) 旧クワンデベレ政府文化局長からの聞き取りによる。
 - 11) ンデベレ伝統村学芸員からの聞き取りによる。
 - 12) 土曜日と日曜日は、学芸員のみが対応している。
 - 13) 愛知県犬山市に1983年に開設された博物館。
 - 14) 左側4名が描き手、右に立つ男性はムプマランガ州より派遣してもらった通訳である。南アフリカでは長い間英語とアフリカーンス語が公用語とされていたが、ンデベレの年配者の多くは、アフリカーンス語は十分に解するものの、英語はわからない場合が多い。
 - 15) リトルワールド友の会会員や一般からの応募者を対象に、1995年10月15日「ンデベレ族の暮らし」というタイトルで、リトルワールドセミナーを実施した。ンデベレの概要を装飾文化を中心に紹介した後、復元作業中の展示家屋の見学を行った。
 - 16) 1995年7月22日から10月22日までの93日間、リトルワールド本館メインホールにて、第22回テーマ展「南ア・ンデベレ族のデザイン」を開催した。
 - 17) (亀井 1995b; 1995c; 1995d; 1999b) 参照。

文 献

- Courtney-Clarke, Margaret
1986 *Ndebele: the art of an african tribe*. New York: Rizzoli Intenational Publications.
- Hammond-Tooe, David
1993 *The Roots of black South Africa*. Johannesburg: Jonathan Ball Publishers.
- Horrell, Muriel
1969 *A survey of race relations in South Africa 1968*. Johannesburg: South African Institute of Race Relations.
- 星 昭・林 晃史
1978 『世界現代史13; アフリカ現代史 I』東京: 山川出版社。
- 亀井哲也
1995a 「収集・調査報告; 南アフリカ」『リトルワールド年報』17, 7-16。
1995b 「フィールドノート; 壁絵のある家に住む人々——南アフリカ・ンデベレ族」『季刊リトルワールド』55, 6-11。
1995c 「博物館の目; テーマ展「南ア・ンデベレ族のデザイン」」『季刊リトルワールド』55, 12-15。
1995d 「博物館の目; 南アフリカ・ンデベレ族の暮らし」『季刊リトルワールド』56, 12-15。
1997 「収集・調査報告; 南部アフリカ」『リトルワールド年報』19, 22-24。
1998 「収集・調査報告; 南部アフリカ」『リトルワールド年報』20, 6-8。
1999a 「収集・調査報告; 南部アフリカ」『リトルワールド年報』21, 7-11。
1999b 「フィールドノート; ニャベラ記念日とンズンザの歴史」『季刊リトルワールド』70, 11-16。
2000 「収集・調査報告; 南部アフリカ」『リトルワールド年報』22, 3-6。

亀井 インデベレの装飾と博物館

亀井 哲也・品川 滋邦

1996 「展示活動報告；南アフリカ インデベレ族の家」『リトルワールド年報』18, 38-43。

Kamei, Tetsuya

1998 *Ingoma: Ndebele boy's initiation*. In K. Kurita(ed.) *Ethnological Studies in Southern Africa: The Nyakyusa (Tanzania), Shona (Zimbabwe), Ndebele (South Africa), and Tswana (South Africa)*, pp. 46-59. Tokyo: Occasional Papers No.7, Centre for Asian Studies, Rikkyo University.

KwaNdebele Monument Committee

1983 *The Nzundza-Ndebele and the Mapoch Caves*. Pretoria: Cyro Print.

Randall, Peter

1983 *Survey of race relations in South Africa 1982*. Johannesburg: South African Institute of Race Relations.

Shabangu, Thos M. & J. J. Swanepoel

1989 *Isihlathululimezwi*. Cape Town: Maskew Miller Longman.

van Warmelo, N. J.

1937 Grouping and ethnic history. In I. Schapera (ed.) *The Bantu-speaking tribes of South Africa*, pp. 43-66. London: George Routledge & Sons, Ltd.